

## 生産の喜び

大阪大学工学部 津和秀夫

## 若者よ、刃物を執れ

その昔、といっても10年位以前に「刃物を持たない運動」というのが、マスコミによって、全国的に展開されたことがあった。学校に通う子供が鉛筆を削るナイフを持っては危険だから、いや平和国家の精神に反するから、刃物を持つまいという運動である。

この運動は見事に成功して、子供達は鉛筆削機で削った鉛筆を、筆箱一ぱいに詰め込んで学校に通うようになった。一儲けしたのは鉛筆屋と鉛筆削り屋、そして生死の関頭に立たされたのは、兵庫県の小野を中心とするナイフ製造者である。何十軒もの小さな工場が、血の出るような思いで築き上げた「肥後守」という小刀の売れ行きがハタと止まったのである。私はこれに、社会的な義憤を感じた。

何故子供がナイフを持ったらいけないのか。

ナイフが平和的でないというなら、料理庖丁や裁縫鋏みはどうする。平和のために、料理、裁縫を止めてしまえという馬鹿者はいないだろう。安く簡単で便利なナイフを取り上げて、高くで壊れやすい文化的(?)な鉛筆削機を買わねばならない理由が、どこにあるのか。

それよりも、もっと恐れることは、子供達がナイフを使うことを忘れ去ることである。刃物は人類にとって、その生存の最初から伝わる基本的な道具である。これを使ったからこそ人類は現在の文明を築いた。そしてまた文明の進んだ現在においても、刃物が立派に最先端の文明

の利器を生産している。だから刃物は三種の神器の一つとして崇められている。その刃物を、次の時代を背負うべき子供の手から取り上げようというのである。春秋の筆法をもってすれば「刃物を持たない運動」の推進者は、亡国の徒輩である。

「亡国」とは、いささか話が大きいかも知れないが、「衰国」であることだけは確かである。では、子供が刃物を忘れると、なぜ「衰国」になるか、説明をしよう。

人間は、生れてから育って行く間に、人類進化の過程をたどるものである。石器時代の始めに、人類が刃物を求めて、石を研ぐことを覚え、その刃物を使って諸々のものを生産したと同じように、子供たちは刃物を持ち、これを研いだり、これで物を削ったりしたが。これこそ、人間の持つ素朴な本能から出発したことなのである。しかし、この本能は男の子だけに限られており、女の子は別である。女にはもっと崇高な子孫生産の本能がある。

生産は総べてこの本能から出発する。男の子が持つ生産本能を素直に伸ばしてやってこそ、未来の文明文化が育つのである。

子供はナイフで木を削り、竹をそいでいる間に、うまく削るにはどうすればよいか。切れなくなったナイフはどうしたら研げるか。うまく研ぐにはどうするか。そして、よく研げたナイフで仕事をすれば、どれほど楽に、しかもどれほど奇麗に削れるかということを体験する。

## 生産と技術

こうして、知らず知らずに体得した基礎知識こそ、現在の生産工学の基本原理なのである。工場で複雑精密高速強力な機械が働いていて、いかにも難かしいことが行なわれているように見えるが、その実、ことは極めて簡単、子供が本能的に体得した基礎原理を踏み出したものは一つもない。

その上、もっと大事なことは、子供が刃物を扱っているうちに、技能という大事な能力を身に着けるということである。これは理窟や学問では解き得ない。もっと高級な人間能力である。この技能が、科学文明の最先端を行く部門には必ず要るのである。ヨーロッパでも米国でもこのことをよく知っていて、技能を大切にしている。それにも拘わらず、技能的に最高の能力を持つ日本人が、技能を捨てて省りみず、子供から刃物を取り上げて、自から技能の苞芽をつみ取ろうとしている。「衰国」になるのは当然といえよう。

さらにもっと大切なことは、子供がこうして自らの手で物を造るときに体得する強烈な「生産の喜び」を味わい得ないということである。この喜びこそ、人間社会を明るくし、人類の未来に光明をもたらすものなのである。「生産の喜び」とは何か。これが、本稿の目指すもの、後でゆっくりと読んで頂きたい。

ともあれ、「刃物を持たぬ運動」は、ここまで考えてのことなのだろうか。昔から、「角をためて牛を殺す」という諺がある。牛の角の格好が悪いからといって、これを整形して牛を殺してしまう馬鹿者のことをいうのである。平和が欲しいからといって、刃物を捨てる者は、全く同じたくいである。

昔、私たちの友達は、「若者よ銃を執れ」と、ペンを捨てて、戦場に征った。私はいま「若者よ刃物を執れ」と言いたい。人類未来の繁栄のために。

## 三つ子の魂

人間は不思議なものである。五十歳を過ぎた現在、昔のことはほとんど忘れているのに、今でもマザマザと思い出す幾つかの古い体験がある。しかも、その体験は、何でもないことで、その頃はもちろん、長い間忘れ去っていたことでありながら、最近になってふっとよみがえったという種類のものである。

確か小学校の三年生、手工の時間に、先生が切り出しナイフの研ぎ方を教えて下さった。とても難かしいものではあったが、何かしら、この技術に興味を覚えた。「こんな研ぎ方をしなさい」「こんなになると丸研ぎになって、切れなくなります」

一生懸命に研ごうとするが、手が定まらず、ただ小刀を砥石にこすり付けるだけである。それを先生がちょっと手伝って下さると、忽ち木や紙が切れるようになる。

それから私は、研ぐことに身を入れた。それというのも、よく切れる小刀で木の小枝を切ったり、竹を切ったりして、野山を駆けめぐりたい願望のためである。一心は恐ろしいもの、やがて刃研ぎのこつを何とか体得した。

自分が研いだ小刀で、手工をしたり、鉛筆を削ったりするのは楽しい。私は授業時間によく鉛筆を削った。退屈だからといって、他所見をしたり、いたづらをしたりすると叱られる。だから鉛筆を削るのに限る。勉強の準備作業であってみれば、先生も叱るわけには行かない。

私の鉛筆は、ろくに使いもしないのに、直ぐにちびてしまった。私の筆箱の中は、種々雑多な鉛筆の陳列場のような感じだった。長く削ったもの、芯の長く飛び出したもの、ほとんど直角に近い急角度に削ったもの、豆つぶほどに短かくしてこまにしたもの、ほとんど芯だけになる位に木を細く削り上げたもの、こったのには彫刻までもしてあった。要するに、まともな鉛筆は一本もなかった。これには母もあきれたと見え、私

が成人した後までも、それを笑い話にしていた。

それが不思議なもの、今はその小刀研ぎが本職になって、磨いたり、研いだり、削ったりを、研究したり、人に教えたりしている。

### 技能の力

それから十年、私は大東亜戦争開戦の年に大学に入った。祖国の迎えた重大局面ということから来る挙国的な緊張感と、生涯の方向を定める職業教育への進学という個人的な使命感とから、私は心を入れ変えて勉学に励んだ。

そのようなある日、実習の時間に、強烈な印象を受けることとなった。これまた、私の生涯にとって、研究の方針を定める重大な半日となったのである。

実習の指導は武用さんという中老の方、長身瘦軀の上品な風采を、今でも思い出す。武用さんは呉海軍工廠でたたき上げた人で、停年後、大阪の工業奨励館に来られ、私どもの大学には週一回の実習指導に見えられた。

武用さんには、いろいろのことを習ったが、最も重大となったのはブロックゲージのラッピングというものである。ブロックゲージとは、機械工場で物指しの規準となるもので、加工されたものの中で、最も精密なものである。小さな積み木のような鉄片ではあるが、その精密さのために価格は驚ろくほどに高い。108個を一組にして箱に入れられているが、その価格が40万円もする。自動車の買える値段である。それもそのはず、ブロックゲージがあるからこそ、飛行機や自動車や、その他あらゆる機械の心臓部が立派に造れるのである。

日本の技術は海軍から始まった。海軍は日本の機械技術の最先端を独走していたわけである。その海軍が、ブロックゲージの重要性を憶い、その国産化を目指したのが、大正の中期、そして一応昭和の始めには、呉工廠で製造に成功している。その方法はラッピングという全く単純

な方法で、定盤という鉄のまな板に磨き粉と油をつけて、それにゲージをこすり付けるに過ぎない。誰にでもできる方法ではあるが、ブロックゲージとして、使いものになるものは、決して誰にでもできるというものではない。

工廠で永年の修練を積んだ技能名人の入神の業によって、始めてできるというものである。武用さんは日本で始めてブロックゲージを造った数少ない技能名人の一人だったわけである。

武用さんがラッピングをするのを見てみると、墨をするような、何でもない作業である。そして出来上がった面は、疵一つないピカピカのものとなる。ところが、自分でやって見ると、決して容易なものではない。容易とか困難とかいう問題ではなくて、不可能に属すること、しかもその不可能は、私たちの手の届くところからは遙かに遠い、ということがわかった。

第一に、私の仕事では面が平らにならない。いわゆる「面だれ」といって、周辺部が余計に減って中央部の高い面となる。それから疵がどうしても残る。そしてこの疵は、一生懸命にこすればこするほどにひどくなるので、一層に始末が悪い。とにかく、その昔に小刀を研いだ作業と比べて、格段の相違である。

呉海軍工廠第一級の技能者、すなわち日本の名人の腕は、到底われわれ如き、馳け出しの初心者には真似られないところだった。私はここで技能の力というものを知らされた。これは理屈にはならないこと、ただ神秘的な人間能力である勤とか修練とかいうものだけがなし得ることである。

このときは、ただ熟達者の至芸に驚ろいただけではあったが、この印象はいつまでも残り、数年後にラッピングの研究を始めたのも、そしてもっと後に技能重視の必要性を論じるようになったのも、総べて、このときに苞芽をきざしたのではないかと思われる。

生産工学を学んで

それから三十年、私もいつしか、当時の武用さんの年齢に近づきつつある。思い出して見ると、その三十年間は、決して平穏な歳月ではなかった。真珠湾から始まる無敵の帝国海軍時代、そして米国の反攻、生産力の差から来た敗戦の汚辱、戦後の混乱、そして経済成長から現在の繁栄まで、歴史の流れは狂風となって目まぐるしく私の眼前を通り過ぎた。そして私自身も、風にそよぐ一本の葦にしか過ぎなかった。

私は、どうした因縁か、機械加工とくに精密加工の研究者としての道を歩むことになってしまった。幸に、同じことを研究し続けることができたので、何だか一つの思想が頭の中で、いやむしろ心の中で固まって来たような感じがする。

生産とは、人間が欲しいものを、造り出す手段であるから、誰でもが手に入れることのできる価格で供給できるように、生産しなくてはならない。すなわち大量に造って価格を下げることに、これが生産にとっての金科玉条であった。これは産業革命以来、常に目指して来たことではあったし、とくに日本においては、また物資の極度に不足した戦中戦後を通して来た現代の日本においては、生産すなわち量産というほどに切実なものであった。

しかし私どもの目指した精密加工は、量産とは逆の立場をとるものであり、いわゆる時流からは置き去られた部門として、省みられることもなかった。

だがヨーロッパにおいても、量産の本家アメリカにおいても、量産から離れて、最高品質を追求しようとする部門が残されていた。機械工業の水準向上には、必らずこの種の高品位生産が必要なのである。米国におけるアポロ宇宙船の成功は、この技術の成果の上に成り立っている。ところが、日本だけは、举世滔々と量産技術のみを追求して、安易な経済成長にばかり熱

中して来たのである。

今ようやく量産とか大量消費が批判を浴びるようになって来た。これは科学時代始まって以来、最初の出来事である。量産から来る害毒が公害となり、人心の荒廃となり、社会不安の一つの原因となろうとしているということは、過去には全く想像もできなかった新しい現象である。

これからの時代は、ただ造ればよいという時代ではない。生産者は謙虚に需要者の便宜を憶って、価値のある立派な製品を造らねばならない。また需要者は生産者の労苦を考えて、その物を大切に使用する心掛けがなくてはならない。

こうして生産者と需要者の心が製品を通じて結び合わされるときには、そこに初めて社会の調和が生まれ、一つの理想郷ができ上ると考えることも、あながち荒唐無稽なことではあるまい。これが高品位生産の社会的影響というものである。

過去の日本は、その国土、人心、風習が示すように、高品位生産によって調和のある社会を築いていた。それが、現在の大量生産一辺倒によって崩壊の危機にさらされ、ここに反省が起ろうとしているのである。

高品位生産に対する適性を、日本人ほど十分に持っているものはない。高品位生産は、学問、技術、技能のあらゆるものを傾倒して始めて達成できるものであり、このどの点をとっても、日本人が最高の能力を示している。とくに技能の力に関する限りは、諸外国に比べて圧倒的な強味を持っている。この力を高品位生産に生かすならば、日本は量産・安価の製品を世界に出す代りに、独特の高級品を少量ずつ世界に輸出して、現在より以上の繁栄を続け得るのである。いわれる付加価値の高い品というものは、この技能によって支えられたものなのである。

そこで話は元に戻る。少年から小刀を取り上げることは、日本伝来の宝である技能の芽を双

葉のうちに摘み取る暴挙なのである。それだけではない。生産の喜びを少年時代に体験させないようにすることなのである。恐ろしいことといたい。

私は三十年間生産工学を学び、体験して来た現在、声を大きくして言いたいことがある。それは、生産の喜びというものを、世間の皆さんに知って頂きたいということである。理屈を抜きにして、「つくる」ことには本質的な喜びがある。この喜びを突き詰めて行くと、そこには「生産道」という、古くて新しい高次元の考え方が生まれる。

生産工学は単なる技術に過ぎない。その技術を含めて、もっと奥深いところに生産道がある。ここには精神的なもの、社会的なもの、技能、科学、技術、信仰、心理、環境、等々あらゆるものが入って来る。この生産道こそは、西洋人のなし得ないところで、日本人の独壇場である。剣道、柔道、茶道などの諸道と同様に、いやそれらよりも一層盛んに、生産道を発展させねばならない。

これからいよいよ、私の本論とする「生産の喜び」から「生産道」へと進んで行きたい。

### 生産の喜び

本能に根ざしたことは永遠の真理であり、そこに人間は最大の喜びを感じる。人間は四足動物から進化して手を持つようになったとき、その手を動かして「生産する」という本能ができた。生産本能は、自己の肉体を維持する本能、子孫を生み育てる本能と全く同格のもので、万物の霊長である人間だけに特有であり、それだけにまた強烈な本能である。

だから人間は農作物を作り、生活のために必要な多くのものを造ることに、本能的な喜びを感じるのである。この「生産する」喜びは、どれほどに時代が変わろうと、人類のある限りは永遠に続くものである。

ところが、最近の工場生産の場では、この生産の喜びが薄らぎ、失われようとしている。人は巨大な生産システムの中に埋没してしまって生産ラインの命じるままにただ機械的に手を動かしているだけになり、製品の極く小部分に関与することとなった。あるいはまた冷酷な機械の番人となって、ただ機械の造るに任せるだけということになった。くる日もくる日も、自分が生産するという実感なしに働くのでは、余程に非凡な人でない限り、職場に喜びを感じなくなるのは当然である。

この生産の喜びが薄れたところから、現代社会の凡ゆる病根が生まれたと考えることも、あながち思い過ぎではあるまい。生産に喜びを感じないままに、生産者はただやみくもに品質劣悪な規格品を造りまくる。そしてその製品を大衆に向って、有用であろうとなかろうと、無頓着に押し付ける。そこには大変有効強力な魔術師であるテレビ、ラジオ、新聞というマスコミが備わっている。大衆はマスコミのトリックにかかって、必要でないもの、また立派でもないものを買うために、大事な財布の底をはたく。この場合、生産は使う人のためを考えての作業ではなく、生産者の利潤追求の手段なのである。

使う人の側にも問題がある。物は自動的に大量に、簡単に造られると錯覚しているから、物を大切にすることを考えない。湯水のように消費をして平気である。「消費は美德なり」とか「使い捨て」と称して、ただ無闇矢たらに使いまくり捨てまくる。そこには生産者の苦勞や心情についての、一片の思いやりさえも挟まない。「生産者」と「消費者」との間が、このようにドライになり果てたということは、社会全般の空気が乾いたということである。人は自分のことばかりを考えて、他人のことを思いやらず、その輪廻がめぐりめぐって、社会全体を潤いのないものにしてしまったのである。

これとは逆に、「生産者」と「消費者」とが

## 生産と技術

生産された「物」を媒体として、しっかりと結び付くならば、今の社会は立ちどころに、落ち着きのある調和社会、心の豊かな人達の構成する理想郷になるはずである。生産者は消費者のことを思い、「生産の喜び」を持って生産する。消費者は生産者の恩恵を感じて、大切に「使う喜び」を体得する。このときは、造られたものを通じて、両者が目に見えない糸で、なごやかに結び合わされるのである。

とにかく、こうした理想郷顕出のための第一歩として、生産者は生産の喜びを持たねばならない。この喜びとは一体どのようなものか。私はつぎに書く五項目に要約できると考えているので、以下に解説を加えることとしたい。

### 生産五つの喜び

#### その1 完成の喜び

ある生産会社の人事部長さんから聞いた話である。模型飛行機やら船や汽車などの、いわゆる模型造りに熱中したことのある人は、採用後の成績が非常によく大成するそうである。私はこの話を聞いて、なるほどと共感を覚えた。そして大学で、つまらぬ実験や実習をするより模型造りをさせてはと、とっぴょうしもないことを思ってもみた。

模型造りには、調査から計画、設計、材料購入から予算、加工技術、器具、工具、製造期間など、生産工場にある諸問題が総べて含まれている。そして、窮極の目指すところは立派な模型を造り上げて、飛ばしたり走らせたり、眺めたりという、完成の喜びを味わうことに帰する。長い歳月を掛け、わずかの余暇を利用して、肝胆を砕いての努力も、ただ一つの「完成」の喜びを味わいたいがためである。だから、模型マニアは、一つ造った模型に満足せず、次から次へと新しい模型を造りたがる。そして模型を売ろうなどとは決して考えもしない。

この完成の喜びを強烈に体験したということが、生産工場の仕事に自然に反映され、仕事に

喜びを感じるので、自然に仕事もはかどるといふ輪廻になる。

ところが、今の生産工場では、この完成の喜びを味わえなくなったという。製造は分業化され自動化され、人は製品の極く一部の小部分にしかたづさわることができない。これでは完成の喜びもあつたものではないというのである。

一応はもっともな道理である。しかし、これは誤まった考え方と、私は思う。どんな小さなことにも完成の喜びはある。それを味わい得ないのは、企業者が従業員に味わはそうとしないから、そして従業員自身が進んで味わおうとしないからである。

たとえば、ワイシャツを縫製する工場があるとする。ここでは量産システムをとるから、作業者の一人一人は、ラインの中で、ミシンに向い、自動機に向って、ただ一定のタクト時間内に、一定のごく限られた仕事をしておればよい。

そこの工場管理者は、このように言ったらどうだろう。

「A子さん、あなたのかがったボタン穴がよいので、このシャツはこんなに着やすいですよ」

「B子さん、あなたの造った芯地が立派なので、襟の具合がこんなに見事です」

「C子さん、D子さん、皆さんがほんとうによく造って下さるので、うちのシャツはお客さんから大変に賞められています」

「この間も御屋さんから袖の仕上げが丁寧だという評判を聞きました。これはE子さんとF子さんですね。よくやって呉れました」

「しかし、襟のこここのところの形が、もう一つということも言われました。これはK子さんとU子さんの仕事ですね。ここは一番難かしいところですから、苦情が出て当たり前なんです。私はよくできていると思うんですが、お客さんは何も知らないだけに、いろいろ言いますからね。気にすることは無いですが、私といっしょに、いろいろ工夫しましょう」

こうした心掛けの経営者や管理者のもとにある従業員は、知らず知らずのうちに、完成の喜びを味わい、製品の品質は知らぬ間に向上するのである。

## その2 奉仕の喜び

人は他人のためになることをしたと思うとき、本質的な喜びを感じるものである。奉仕ということは、貧富の区別なしに誰しものが、どこかで実行し、心に何がしかの満足感を味わっているものである。

毎朝街路を掃除する人、駅に花を飾る人、慈善事業にお金を出す人、皆奉仕の喜びがあればのことである。泥棒でさえも乞食にお金を恵むのである。所詮、人は社会を構成して、その社会の中でしか生き得ない動物であってみれば、他の人に奉仕するという事は、とりも直さず自分を社会の一員として位置付けすること、逆にいえば、奉仕をし得ない人間は社会生活の出来ない人、すなわち人間ではないということになる。

物を造る人は、その造った物を他の人が使って喜んで呉れると思うこと、すなわち奉仕をしているという気持を、心の底にしっかりと刻まねばならない。「生産とは奉仕なり」という社会構成の根本哲理を忘れ去って、近代の人達は、自分のために、自分の社会のために造っていると錯覚したところに、現代の悲劇がある。

自分が精魂を傾けて造った品には、自分の心が移る。その心は品物を通して直接に使う人の心に触れ合うのである。だから使う人も自づから、その品を大切に使う。生産者が奉仕の喜びを想うこと、これが世の中を立派にするための第一段階である。

今の世の中は、個人のことを言い過ぎるため奉仕の精神が薄れているのは残念である。アルバイトはしても奉仕はしない。アルバイトによっては物質的な喜びを得るかも知れないが、奉仕によってはもっと大きな心の喜びを掴むこと

ができるのである。このことを知らない人達はあわれといたい。

## その3 報酬の喜び

生産するという事は社会に対して役立つこと、すなわち奉仕であってみれば、その奉仕の程度に応じて、正当な報酬を得るのは当然のことである。奉仕があれば報酬があるというのがものの順序であるにもかかわらず、奉仕もろくにしないのに、報酬ばかり要求するとすれば、これは本末転倒である。

現代の労働運動はこの本末転倒を地で行くものである。報酬などという高級な言葉は使わずに、俗悪な賃金という言葉を使う。働らくことをできるだけ少なくして、賃金だけはできるだけ多く出せという。かてて加えて無能経営者がまかり通って、会社経営とは自己の金もうけなりとのモットーで立ち回るために、反って労働運動の隆盛を援助することとなる。これでは敵わぬとなったときには、何でもかんでも、もうけるものを造れとなって、同業者をつぶしたり世に害毒を流したりする。悪い方に回る輪廻である。

奉仕に対する正当な報酬と考えれば、輪廻は自づから世の中を良くする方向に回り始めるのである。

## その4 修練の喜び

人は冷酷な生産ラインの中であって、来る日も来る日も単純な一定作業の繰り返しを行なわされているという。まるで機械のように、つまらない仕事をさせるとなげく。なる程これは一理も二理もあるもったもな話である。

しかし、ちょっと違った観点に立って、単純繰り返し作業も眺めて見ると、これさえも、決して人生にとって無意味なものではなくて、非常に価値のある作業となるから面白い。

単純作業の繰り返しは修練に非常に役立つということである。この種の仕事は単純であればあるほど頭を使う必要がない。いわゆる無我の



## 生産と技術

境地に入り得るのである。無我の境地に入り得るといふことほど、人生にとって重要なことはない。参禅をしたり、行をしたり、読経三昧に明け暮れるのも、皆この無我の境地に入りたいためにすることである。

単純繰返し作業を修練と見て実行するならばこれほど有難い仕事はあるまい。そうすれば、そこに喜びを感じるのは自然の姿である。まして修練によって作業の能力が上達し、技能熟練者や名人達人にさえなることができるのである。

産業界各界が名人達人の技能者を要求しているのは、今日ほど急なものはない。高品位の生産は機械だけの力では不可能で、そこには必ずこれら技能熟達者の腕を必要とする。今後の産業界発展のためにも、生産者は修練の喜びを感じなくてはならない。

### その5 向上の喜び

人は何のために生きるか。古来より多くの哲学者や宗教家によって論じられたことではあるが、簡明直截にいうならば、ただ一語「向上」ということに尽きると、私は考えている。よい妻を得て子孫を向上させる。自らを養って自己の向上を計る。社会に奉仕して社会の向上を願う。これが、この世に生を享けたものの目標である。

そこで生産するという事は、社会に奉仕し、自己を修練し、完成の喜び、報酬の喜びを得るとすれば、人生の目的に合致した「向上」の勤行そのものであるだろう。だから生産を通じて、私達は人生の目的を達しようとしていることを感得しなくてはならない。

工場には機械があって、経営者と労働者があり、生産技術を駆使して、製品を生産するという単純な物質万能の西歐的思考方は、今日および将来の日本においては通用しないのである。つくることによって自己を向上させること、いかえれば人生の目的を達成しようとする人達の集まるところが工場である。単に物質的な結

び付きによって維持されるものではなく、もっと精神的な要素の入ったもの、すなわち工場とは生産の道を学ぶ道場、あるいは生産道場ではなくてはならない。

この生産道場においては、生産技術とか経営学とかいう次元の低いもののほかに、もう一段と高次元の「生産道」が行なわれなくてはならない。

## 生産道

生産は単なる工学的問題だけで片付けることができるほどに単純なものではない。人間社会の諸々の問題が生産と関連を持っているからである。

われわれは、物を生産する機械でもなければ、ましてやコンピューターでもあり得ない。喜怒哀楽の感情を持ち、煩悩を懐き、向上と幸福を願う血の通った生きものである。

このような人間が、人間のために行う生産であって見れば、能率とか生産技術とか、生産管理とか何とかいう形而下の問題の外に、そのもっと奥深いところにある形而上の問題をも含めて考えねばならない。生産技術だけを対象にするものは生産工学であり、もっと広く経済や管理や社会学などを含めれば生産学となり、さらにその上の精神作用にまで対象を拡大したときに、始めて生産道となる。

この生産道が考えられず、徒らに枝葉末梢の生産学や生産工学が研究されたところに、現在の生産工場、いや現在社会の悲劇がある。生産道によって、生産の道を極めてこそ、本当の生産ができるのである。この生産道は古来、日本では行われていたはずである。だからこそ後世に遺る美術工芸品が生まれ、刀剣武具として、世界に冠絶するものが出来たのである。私達の先祖は賢明であったのに、科学時代の現在日本人は愚鈍である。何一つとして、後世に誇るべきものを創り出していないではないか。いやむ



しろ、先祖の遺産である尊いものをぶち壊わして、しかも喜んですらいる。

「道」とは、全く東洋的なもの、西洋の思想からは生まれえない。たとえば武士道について、西洋人も非常に興味を持ち「葉蔭」の考え方を研究はする。しかし所詮は、その精神の深奥までは理解することはできない。サムライとは不思議なものということになってしまう。ところが、日本人には武士道というものが、特別の勉強をしなくても直感的に理解できるのである。

武士道とは戦場における武術だけを指すのではない。ものあわれを解し、風流をたしなみ、人を生かし、世を救うこともまた、武士道の根本義である。しかも自己に対しては、厳しく己を律し、透徹した死生観のもとに、人生を考える宗教がある。西洋には騎士道があっても、そ

れは武士道に比べて、その深さが違っている。

過去の日本には武士道があった。その武士道が近年に至って余りにも安易に言われ過ぎたために、大東亜戦争では似而非武士道が横行し、ために敗戦の汚辱を受けたのである。

生産道こそは生産の真髓を衝くもの、これを探求してこそ、始めて生産がその本来の姿に帰って、人類社会の福祉増進のためにだけ役立つようになるのである。そのときは、生産とは生産道を行うこととなるので、生産工場は総べて生産道場となる。

〇〇工場という名前に代わって、〇〇生産道場が、日本の津々浦々にまで建設されたとき、我が国は始めて、東海の理想郷となるのである。しからばその生産道とはそもそも如何なるものか。各界具眼の士によって深く求められねばならない。